

**中国革命の生みの親・宮崎滔天**

前坂俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

極度の貧乏と浪人暮らしに耐えながら、中国革命成就のために献身的に孫文(そんぶん)を助けた宮崎滔天(みやざきとうてん=本名は寅蔵)。



孫文は中国革命の父、中華民国誕生の「国父」として讃えられているが、滔天がいなければ孫文も革命に成功しなかったであろう。その点では宮崎滔天こそ中国革命の生みの親と言っても過言ではない。

滔天は明治三年(一八七〇)十二月、熊本県玉名郡荒尾村(現・荒尾市)の郷土だった宮崎家の十一人兄妹の末っ子に生まれた。

この宮崎家は有名な「自由民権一家」で、「九州のルソー」といわれた長兄・八郎は西南戦争で戦死。

」

兄民蔵は土地の平等な配分を目指して「土地復権会」を組織、欧米を遊説して回った。下の兄弥蔵(やぞう)は中国に革命を起こして、アジアを解放する「革命的アジア主義」を唱えた。

滔天は弥蔵から大きな影響を受け、中国革命運動の実践に入る。弥蔵はまず中国語を覚えるために、横浜の中国商館のボーイになり、滔天は革命の資金作りのためタイへ移民二十人を連れて渡航し、開墾することになった。

〔孫文との運命の出会い〕

一方、孫文は、革命組織「興中会」を結成し、日清戦争後、広州で最初の挙兵を行ったが失敗して亡命、ロンドンで中国公使館に監禁された。その時の模様を「ロンドン被難記」

として出版し、一躍、革命家・孫文の名が世界中に知れわたった。

明治三十年八月、ロンドンを離れた孫文は、革命の拠点を日本に移し、横浜で初めて滔天に出会った。滔天は孫文の革命家としての資質をひと目で見抜き、「実に大人物で、東亜の珍宝である」と敬服、協力を誓った。

以後、約十年におよぶ孫文の日本亡命中、滔天は貧乏のどん底が続く中でも、常に身元引き受け人の役割を果たし、家族の一員として、武器等の調達、資金集めなど援助を惜しまなかった。



辛亥(しんがい)革命に成功するまで革命蜂起は約二十回もの失敗につぐ失敗の連続であった。失意の底に落ちた滔天は一時、絶望して、革命精神の鼓吹と資金稼ぎのため天下の浪曲師・桃中軒雲右衛門の弟子となった。

<写真は辛亥革命勃発後(1911)、帰国した孫文を香港のデンパー号船上で迎えた滔天ら革命同志>

明治三十八年七月、滔天は孫文に、のちに革命の右腕となった黄興を紹介する。この縁結びが成功して、革命三派が合同して革命推進の「中国同盟会」が生まれた。

孫文の三民主義を綱領とした中国史上初めての革命政党が誕生し、総理に孫文、副総理格を黄興がつとめ、機関誌発行人に滔天がなった。

一九二年(明治四十四)十月十日、辛亥革命が勃発する。

孫文の広東蜂起から十六年、清軍に敗れ続けた革命蜂起がついに成功した。米亡命中の孫文は急ぎ帰国し、中華民国臨時大總統に就任し、革命の基礎が築かれた。

ここに滔天の「革命の夢二十五年」はついに成就した。

この就任式に、一文なしの滔天は近所の出入り業者のカンパによって出席した。

だが、革命は一筋縄にはいかない。

孫文は四カ月で辞任に追い込まれ、袁世凱(えんせいがい)が大総統に就任し、南北両政府の対立と内戦が激化する。

日本政府は袁世凱の北京政府を支持、南京政府の孫文は再び苦境に陥り、またも孫文は日本へ亡命するが、滔天の支援は終生変わることがなかった。

〔革命半ばの急死〕

大正七年(一九一七) 二月、当時、湖南省の師範学校学生だった毛沢東は滔天に手紙で依頼して、同校での講演会が実現したが、毛沢東はこれに感激し、終生尊敬の念を寄せていた。

袁世凱からも、滔天の中国革命への貢献に報いるため、「米の輸出権の一部を与える」との電報が届いたことがあったが、「渴(かし)ても、盗泉(とうせん)の水は飲まぬ」と言下に断った。

中国革命を支援した大陸浪人の大部分は利権あさりの侵略主義者が多かったが、滔天は終始一貫、純粹、無私に支援し、中国革命の成功が日本の革命、世界革命につながると信じていた。

だが、革命半ばの大正十一年十二月、五十三歳で急死してしまった。

翌年一月、孫文主催の「宮崎滔天追悼大会」が上海で開かれ、孫文以下、国民党の首脳が残らず出席。

「日本の大改革家、中国革命に対して絶大な功績者」として最大級の賛辞を送った。

**禁転載**